



# 農事普及だより

(6月号 令和元年6月1日～6月30日)

〔発行〕鶴田町／鶴田町農業支援センター／鶴田町産業課  
つがるにしきた農業協同組合鶴翔統括支店  
西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室  
〔編集〕西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室



（令和元年5月24日 仙台管区気象台発表  
東北地方3か月予報より）

期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。



きめ細かな水管理で生育促進に努めよう！

## 1. 水管理

分けつ（茎数の増加）の適温は、日最高で30～32℃、日最低で15～17℃、日較差15℃前後である。  
日平均温が19℃以下になると分けつの発生が少なくなるため、間隔止・夜間かんがいを基本とし、暖かい日は浅水で水温を上昇させ、寒い日は葉先が冠水しない程度のやや深水で保温する。また、漏水防止に努め、掛け流しはしない。  
有効茎数（1株茎数で「青天の霹靂」は18本程度、その他の品種は20本程度）を確保した水田では、6月末頃から高溫（平均気温が20℃以上）で晴天が続くようであれば中干しを行う。中干しは田面に軽く龜裂が入る程度とする。

## 2. 雑草防除

- (1) 初期+中期の体系処理の場合  
初期剤使用後20日頃を目安に中期剤を散布する。  
除草剤の散布後は、除草効果の維持と水質汚染防止のため、散布後7日間は止水し、落水や掛け流しをしない。
- (2) 一発剤を使用し、残草が見られた場合  
残った草種に応じて除草剤を散布する。除草剤は使用基準を必ず守り、他の作物に飛散しないように注意する。

### ■ 残った草種別に使用できる除草剤の例

- ⑦ 広葉雑草（アゼナ・ホタルイ等）のみ → バサグラン液剤・粒剤  
① ノビエのみ → クリンチャー1キロ粒剤・E W  
又はヒエクリーン1キロ粒剤  
又はワントステージ1キロ粒剤  
⑦ 広葉雑草 + ノビエ → クリンチャーバスME液剤

## 3. 病害虫防除

- (1) イネミズムシ  
移植前や移植時に防除をしなかった場合は、発生に応じて防除し、発生が多い場合は、6月上旬に水面施用剤を散布する。この時期の防除でイネドロオイムシも防除できる。
- (2) 斑点米カメムシ類  
カメムシの発生源となっている水田周辺の休耕田や、カメムシを誘引する畦畔の雑草（主にイネ科雑草）は、開花・結実する前に刈り取る。また、雑草の刈取りは水稻の出穗2週間前（7月中旬頃）までに終了する。
- (3) 葉いもち  
取り置き苗は、葉いもちの発生源となるので、補植が終わったら、直ちに処分する。  
葉いもちは、早い年には6月下旬に発生がみられるので、ほ場をこまめにチェックし、病斑が見られた場合には、航空防除まで待つではなく、直ちに防除する。  
復元田や、いもち病に弱い品種を作付けした場合は、葉いもちの発生が見られなくても、水面施用剤による予防防除を必ず行う。

水面施用剤（オリセメントを含む水面施用剤、オリフライトを含む水面施用剤、ブイゲット粒剤）は、6月20日前後から6月末まで（中干し1週間前を目安）に湛水のまま施用する。施用後1週間は止水し、落水、掛け流しをしない。その間の入水は、水戻を止めたままで行う。

※「青天の霹靂」は、農薬の成分使用回数を地域慣行の1/2以内とすることが必須なので、農薬の使用に際しては成分数を確認する。



大豆の雑草防除と中耕・培土をしっかりと行おう！

小麦の出穂期はやや早まる見込み。赤かび病の適期防除に努めよう！



1. は種  
碎土が粗いと発芽率が劣るので、碎土はていねいに行う。  
は種量は「おおずす」で7kg/10aを基準とする。  
は種直後の多雨は、出芽率、初期生育の不良を招くので、気象情報に注意しながら作業する。  
は種作業は6月10日頃までに終えるようにする。やむを得ず、は種が遅れる場合は畦幅や株間を詰めて、は種量を増やす。

## 2. 雑草対策

- (1) 土壌処理剤  
土壌処理剤は、ほ場表面の水分が低いと効果が劣るので、は種後速やかな散布が望ましい。また、出芽した雑草には効果がないので注意する。
- (2) 基葉処理剤  
イネ科雑草用の基葉処理剤は、薬剤により効果が異なるので発生状況に合わせて選択し、効果的に使用する。  
広葉雑草に使用できる基葉処理剤は大豆バサグラン液剤のみであり、散布回数も1回となっているので、大豆の基葉がうね間に覆う前に使用する。  
土壤処理・基葉処理で残草が多い場合は、畦間処理の除草剤が利用できる。ただし、大豆に薬剤が飛散しないよう、専用ノズル、カバー等を使用する。

## (3) 中耕・培土

- 1回目：本葉2～3葉期 初生葉のつけ根まで軽く土寄せする。  
2回目：本葉5～6葉期 第1本葉のつけ根まで土寄せする。

## 小麦

### 1. 病害虫防除

- (1) うどんこ病、赤さび病  
早期発見に努め、発生初期での防除に努める。薬剤は下葉にも十分付着するように散布する。
- (2) 赤かび病  
開花期から乳熟期にかけて、気温が高く湿潤な天気が続くと発生が多くなる。  
出荷品質に混入すると、人畜に有害なかび毒（テオキシニバレノール）を生産し、下痢や嘔吐などの中毒症状を起こす場合があるため、出荷できない。  
防除は、開花始め～開花期に1回目、その後7日後に2回目の薬剤散布を行う。

## 2. 収穫作業

- (1) ネバリゴシ  
出穫後46～50日、出穫後積算温度830～950℃、子実水分25%を目安とする。
- (2) キタカミコムギ  
出穫後50～55日、出穫後積算温度900～1,000℃、子実水分25%を目安とする。  
穂発芽しやすいので、天候などでは水分30%での刈り取りが必要になる。この場合は速やかに乾燥機に張り込み、水分25%までは送風温度を40℃以下にして品質低下を防ぐ。



良果を見極め、早期適正着果で高品質果実生産に努めよう！

黒星病徹底防除推進期間（4月～6月）的確な防除を行おう！

### ■ りんごの生育ステージ

板柳町五幾形（月/日）						
品種名	区分	発芽日	展葉日	開花日	満開日	落花日
ふじ	本年	4/6	4/18	5/6	5/10	5/15
	平年	4/9	4/19	5/9	5/14	5/19
	前年	4/2	4/16	5/4	5/9	5/14
	平年比	3日早	1日早	3日早	4日早	4日早
つがる	本年	4/6	4/19	5/5	5/10	5/15
	平年	4/8	4/20	5/8	5/13	5/18
	前年	4/2	4/18	5/3	5/8	5/13
	平年比	2日早	1日早	3日早	3日早	3日早
ジョナゴールド	本年	4/2	4/15	5/5	5/9	5/14
	平年	4/6	4/15	5/6	5/12	5/17
	前年	3/30	4/12	5/1	5/6	5/12
	平年比	4日早	並	1日早	3日早	3日早
王林	本年	4/5	4/17	5/3	5/9	5/14
	平年	4/6	4/16	5/6	5/11	5/16
	前年	3/31	4/14	5/1	5/6	5/12
	平年比	1日早	1日早	3日早	2日早	2日早

平年値：平成8年～27年の20年平均

## 1. 摘果

摘果が遅れると、玉伸びや果実品質、次年産の花芽形成にも悪影響を及ぼすので早期適正着果に努める。  
果実品質の良し悪しの判別が可能となった時点から、仕上げ摘果を行うが、本年は6月10日を目安に終えるようにする。

### ■ 標準的な着果程度

品種名	摘果の強さ（残す果実）	着果率（%）
紅玉	3頂芽に1果	33
つがる・ジョナゴールド	3.5頂芽に1果	29
ふじ・王林・早生ふじ・トキ・シナノゴールド・きおう・金星・シナノスイート・未希ライフ・さんさ・ぐんま名月・春明21・星の金貨・千雪・夏緑・恋空・祝・花祝	4頂芽に1果	25
北斗	4.5頂芽に1果	22
陸奥・世界一	5頂芽に1果	20

注）摘果剤を散布した場合、落果は散布10日後頃から始まり、以後10～14日間続く。散布時の天候等の条件によって効果が十分に現れない場合もあるため、仕上げ摘果は遅れないよう注意する。

## 2. ヒオモン水溶剤によるふじ・早生ふじのつる割れ防止対策

開花が早く、大玉になりやすい年や例年つる割れの多い園地では、ヒオモン水溶剤の利用も検討する。

### ■ ヒオモン水溶剤の使い方

品種名	使用目的	使用時期	本剤の使用回数	成分総使用回数	希釈倍数	10a当たり散布量	備考
ふじ 早生ふじ	つる割れ 軽減	満開20日～30日後	1回	3回以内	3,000倍	300～600ℓ	展着剤不要 有効成分：1-ナフタレン酢酸ナトリウム 4.4%

注) 1 本剤は単用散布とする（展着剤は使用しない）。

2 散布後に葉がしおれる症状（エビナスティ）を示すが、1週間後にはほぼ回復する。

3 高温、乾燥時の散布は避ける。新梢先端葉及び樹冠内の果実葉の黄変落葉や頂芽の欠落が発生した事例がある。

4 極端に樹勢の弱い樹への散布は避ける。

5 果実肥大が抑制される場合がある。

6 新梢の二次伸長を助長する場合がある。

7 摘果剤（マイクロテナボン水和剤85）を散布した後に本剤を使用した場合、摘果剤の効果が抑制される。

## 3. 病害虫防除

黒星病が発生していることから、被害葉・被害果は見つけしだい摘み取り適正に処分する。また、感染拡大を防ぐため6月いっぱいは10日間隔での薬剤散布を徹底する。散布に当たっては、散布量を節約せず適量を散布する。なお、散布予定日に降雨が予想される場合は前倒しで散布する。

## 4. 追肥

追肥を計画している場合は6月末までに終える。施肥量は結実量と樹勢に応じて1樹ごとに加減する。

## 5～8月は「農薬危害防止運動」実施期間です

### 農薬の適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう

○ 使用し残った農薬などは、河川等へ絶対捨てないでください。

○ 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください。

○ 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

## 特産果樹



鶴田町境のスチューベンの展葉日は5月8日で、平年より1日早かった

### 1. 新梢の誘引・結束

薬剤や日光の通りを良くするため、新梢は随時角度や間隔を調整しながら架線に誘引し、結束する。

### 2. 摘心（1回目）

1回目の摘心は開花7日前頃に行い、品種や樹勢に応じて強さを調整する。

|
<th
|  |

## 5. 病害虫防除

### ■ 薬剤散布 (スチューベン)



\*農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。

散布時期と10a当たり散布量	基準薬剤名と倍数			
	殺菌剤	殺虫剤		
開花10日前 6月上旬 (250リットル)	アリエッティC水和剤 又はキノンドー水和剤40 又はインダーフロアブル 又はオニリーワンフロアブル	800倍 600倍 8,000倍 2,000倍	ベストガード水溶剤 又はバantan SG水溶剤 又はアグロスリン水和剤 又はアディオンフロアブル	1,000倍 1,500倍 2,000倍 1,500倍
開花直前 6月中旬 (250リットル)	アリエッティC水和剤 又はゲッター水和剤	800倍 1,500倍	ベストガード水溶剤 又はバantan SG水溶剤 又はジノフラン剤	1,000倍 1,500倍 2,000倍
落花直後 6月下旬 (250リットル)	ロブラー水和剤 又はポリベリン水和剤 又はスイッチ顆粒水和剤 又はフルピカフロアブル	1,500倍 1,000倍 2,000倍 2,000倍	アグロスリン水和剤 又はアディオンフロアブル 又はジノフラン剤※	2,000倍 1,500倍 2,000倍

\*ジノフラン剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

- 注) 1 灰色かび病の発生が多い園地では、開花直前にゲッター水和剤を選択する。  
2 べと病の発生が多い園地では、開花10日前にアリエッティC水和剤又はキノンドー水和剤40、開花直前にアリエッティC水和剤を選択し、落花直後にランマンフロアブル2,000倍又はライメイフロアブル4,000倍も使用する。  
3 黒とう病の発生が多い園地では、開花直前にアリエッティC水和剤、落花直後にポリベリン水和剤を選択する。

### <シャインマスカット(露地栽培)>

散布時期と10a当たり散布量	基準薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
新梢伸長期 (約30cm) 6月上旬 (200リットル)	ジマンダイセン水和剤 又はインダーフロアブル 又はオニリーワンフロアブル	1,000倍 8,000倍 2,000倍
開花10日前 6月中旬 (250リットル)	アリエッティC水和剤	800倍
開花直前 6月下旬 (250リットル)	アリエッティC水和剤	800倍
落花直後 7月上旬 (250リットル)	ロブラー水和剤	1,500倍

\*ジノフラン剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

- 注) べと病の発生が多い園地では、落花直後にランマンフロアブル2,000倍又はライメイフロアブル4,000倍も使用する。

## \*おうとう\*

佐藤錦の満開日は5月4日、落花日は5月15日(鶴田町菖蒲川)で、いずれも平年より1日早かった。

### 1. 裂果防止対策

雨よけハウスの被覆は着色が始まる直前に行い、裂果防止に努める。

### 2. 着色管理

#### (1) 葉摘み

果実の着色がある程度進んだ頃(おおむね収穫予定の7~10日前頃)から行い、果実に直接かぶっている葉を軽く摘み取る。過度の葉摘みは果実品質を低下させたり、翌年の花芽の充実不足、樹勢の低下を招くおそれがあるので、摘み取る量は最小限にとどめる。

#### (2) サンキャッヂ液剤30Sの利用

着色促進のためサンキャッヂ液剤30Sを利用する場合は、以下により使用する。

#### ■ サンキャッヂ液剤30Sの使用方法

対象品種	佐藤錦・南陽
処理方法	600倍液を立木全面散布
処理時期	収穫開始14日前(着色が樹全体の2~3割頃)と7日前の2回
散布量	300リットル/10a

- 注) 1 敷布直後降雨は効果を減じるので、晴天日に散布する。

2 樹冠内部が暗いと効果が劣るので、樹冠内部の明るさを適正に保つ。

3 展着剤は不要である。

4 他の薬剤と混用せず、単用で用いる。

### 3. 収穫

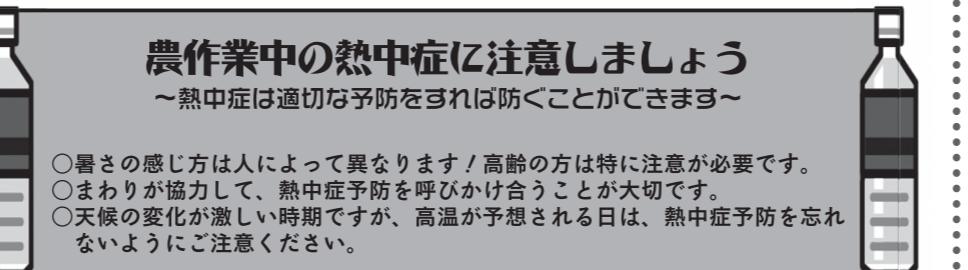
収穫は満開日からの日数が目安になるが、天候によっては早まることもあるので、品種の特性(着色、大きさ、形状、食味など)を重視し、成熟したものから順次、数回にわたって行う。

### ■ 各品種の収穫期

品種	満開日から収穫日までの日数	収穫期(県南果研セ、平年)
紅さやか	40~50日	6月中旬~6月下旬
佐藤錦	50~55日	6月中旬~7月上旬
ジュノハート	55~60日	6月下旬~7月上旬
紅秀峰	60~70日	6月下旬~7月中旬
サミツト	60~65日	7月上旬~7月中旬
南陽	60~65日	7月上旬~7月中旬

## 農作業中の熱中症に注意しましょう

~熱中症は適切な予防をすれば防ぐことができます~



### 4. 病害虫防除

#### ■ 薬剤散布

(県おとうう病害虫防除暦より抜粋)

時期と10a当たり散布量	基準薬剤名と倍数
満開35日後 6月上旬 (500リットル)	<b>殺菌剤</b> アミスター10フロアブル 1,000倍 又はファンタジスタ顆粒水和剤 3,000倍 又はナリアWDG 2,000倍 又はアンビルフロアブル 1,000倍 又はオニリーワンフロアブル 2,000倍  <b>殺虫剤</b> テルスター10フロアブル 4,000倍 又はエクシレルSE 2,500倍
収穫前 6月中旬~下旬 (500リットル)	<b>殺菌剤</b> アミスター10フロアブル 1,000倍 又はナリアWDG 2,000倍 又はインダーフロアブル 5,000倍  <b>殺虫剤</b> スカウトフロアブル 3,000倍 又はエクシレルSE 2,500倍

\*農薬はおとうう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。



- 注) 1 満開35日後以降、灰星病の多発が懸念される場合は、佐藤錦の収穫見込みの7日前頃にルビゲン水和剤、インダーフロアブル、パスマード顆粒水和剤のいずれかを特別散布する。  
2 「紅秀峰」や「南陽」、「サミット」などの晩生種では、灰星病対策として収穫前(7月上旬)にアミスター10フロアブル又はナリアWDGを特別散布する。  
3 ショウジョウハバク類の発生が懸念される場合は、満開35日後と収穫前にテルスター10フロアブル又はスカウトフロアブルを特別散布する。

## \*野菜\*

計画的な管理作業と草勢にあわせたこまめな温度管理に努めよう！

### トマト

#### 1. 定植後の管理

ハウス内の温度は昼間25℃前後で管理する。高温障害が発生しやすいため、天候によりサイド換気や肩換気を行ふ。

気温が低下する日や夜間はサイドを閉め、保温に努める。夜間は14℃以上を目標とする。6月中旬以降、最低気温が14℃以上になれば、夜間でもサイドを解放する。

#### 2. 着果の促進

トマトトーン処理は、なるべく気温の低い午前中に行う。低温時(20℃以下)50倍、高温時(20℃以上)100倍の濃度で、1花房当たり1~1.5cc噴霧する。

1~4段花房は4番花開花始め、5段花房以降は3~4番花開花始めに行い、散布回数は1花房1回とする。

#### 3. かん水と追肥

試しかん水は、2段花房のトマトトーン処理後に1株当たり1リットル程度を目安に行うが、草勢が強い場合はトミー液肥ジャンボ(500倍)を加用する。

本格的なかん水と追肥は、3段花房のトマトトーン処理終了後から行うが、活着が遅れたほ場や草勢が衰えている場合は処理前に行う。

1回当たりの追肥量は、3日に1回の場合は、窒素成分0.5kg/10a以内(トミー液肥グリーンで現物8.3kg/10a以内)、2日に1回の場合は、窒素成分0.3kg/10a以内(トミー液肥グリーンで現物5kg/10a以内)とする。

#### 4. 摘果

3段花房トマトトーン処理後に、1段果房を一斉に摘果する。奇数段は3果、偶数段は4果になるよう摘果する。ただし、草勢が極端に弱い場合は、2段花房トマトトーン処理後1~2果程度に着果を制限する。

#### 5. 病害虫防除

灰色かび病が発生しやすくなるので、葉先枯れ(カリ欠乏症)の予防や花カスを取り除くとともに、ハウス内の換気と薬剤による予防防除に努める。

アザミウマ類の発生が多くなるので、開花前には場周辺のクローバー等を除草するとともに、薬剤による防除を行う。

### メロン

#### 1. 温度管理

定植後は最高気温28~30℃、開花期は最低気温12~15℃を目安に、トンネルの開閉などでこまめな温度・湿度管理を行う。特に夜間の閉めきりは軟弱徒長となり、病害虫の発生の原因となるので、こまめな開閉を心がける。(外気の最低気温15℃以上なら夜間開放)

#### 2. かん水

開花期のかん水は、湿度の上昇により花粉が出にくくなるので控える。  
着果確認後(鶏卵大の頃)から着果2週間後頃までかん水を行う。1回の量は、株当たり4リットルが目安となるが、土壌水分により加減する。  
草勢(つるの立ち上がり、葉色、孫づるの伸長)を見て、液肥や葉面散布を行う。

#### 3. 摘心と整枝

- (1) 結果枝(孫づる)の摘心
  - ① 弱勢の場合：着果節位を1~2節上げ、着果確認後に、孫づるの葉1枚を残し、摘心する。
  - ② 適勢の場合：開花前後に孫づるの葉1枚を残し、摘心する。
  - ③ 強勢の場合：開花予定期の3~4日前に孫づるの葉1枚を残し、摘心する。
- (2) 結果枝以外の整枝
  - 22~23節で子づるを摘心する。15~20節の孫づるを除去する。
  - 整枝は着果後10日までに終了し、風通しを良くし、ネットの形成を促進する。
  - 果実肥大期は、受光体勢を維持するため、茎・葉を動かさないようにする。

## ＊花き＊

適正な温度管理により高品質な花きの生産に努めよう！

### キク

#### 1. 定植前後の管理

採穂に当たっては、太さが揃う充実したものを選択し、定植2週間前から挿し芽を行う。10月出荷の作型は、6月上旬~下旬に定植できるように作業を進める。

挿し芽後は、最高温度25℃を目標に管理し、定植1週間前からは温度を下げて、順化させる。

ほ場は、定植の数日前に十分かん水し、定植後は軽くかん水し、日中25℃以下を目標に管理する。

2. 病害虫防除